

であるが、之が爲めに回鶻人が經典を翻譯する場合に、自分の用ゐる語を Türk 語（即ち突厥語）と稱すべき理由はなく、反対に Türk 人が之を Uighur 語（即ち回鶻語）といふべき理由もない。要するに此等の奥書に見ゆる Türk 語といふものと Uighur 語といふ者とは其の名稱の由來する處、互に相異なるものであつて、同一視すべき理由は無いと思ふ。然るにも係はらず Türk 語といふのを Uighur 語と考へて怪しまないのは、主として其の經典の文字が所謂回鶻文で書かれてあるのに過られた爲ではなからうか。<sup>(1)</sup>

自分は前に所謂回鶻文字は回鶻人の始めて用ゐたものでなく、彼等より以前既に突騎施が之を用ゐたものであることの實例を擧げ、回鶻は高昌に據つてから後之を襲用したに外ならぬ旨を述べた。併しながら突騎施に此の文字を用ゐた明かな證據も、また此の部で初めて此の文字を作り出したか、或は初めて用ゐ出したか等の問題については、何等の決定を與へ得べきものでは無かつたのである。然るに今之と全く同一の文字がかく Türk 語即ち突厥語の佛典に於て認め得らるゝとすれば、その先蹟は既に突厥にあつたといはねばならぬ。突騎施は前にも述べた如く西突厥の別部であり、西突厥の衰へた後其の地を占めて據つたものであるから、其の文字もまた西突厥から承け繼ぐに至つたものと思はれる。

自分は前に突厥には東西ともに大して佛教の行はれた形跡を認め難いことを述べて置いたが、それにも係はらず、もし自分のこゝに見る所が過らないならば、西突厥には少くとも其の一部の間に之が行はれて、諸國の佛典を